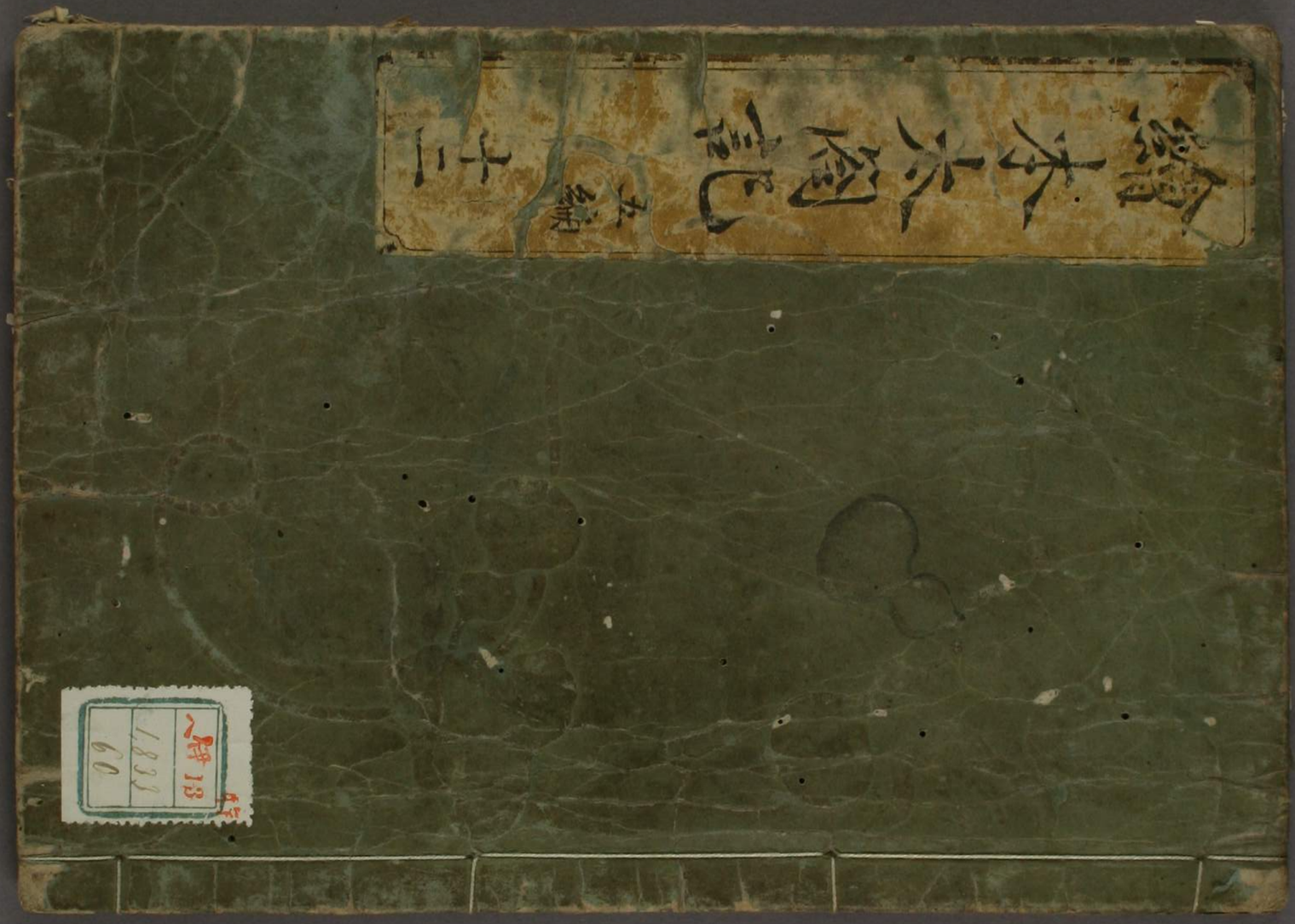

諸水流通 巻之 十二

特へ13
號 1833
卷 60

繪本古國記五篇卷之廿三

目録

八王子落城之話
同 図
山中山城守書送家臣を紛守話
同 図
小田原城兵勢ひて強弓の精兵と殺し図
小田原城中諸侯叛心之話
秀吉の軍兵城外を拉び戲る図
淺田秀勝氏小柴氏房酒肴を送る図

松田左馬允又と落る図

松田尾張守兼京彰六郎搦る図

小田原落城之話

小栗氏出身家郷之浮説と乞図

氏政氏直自害乃図

秀吉公御凱陣の図

奥羽記五篇巻十二

八王子落城

後の小田乃大名摩恵多年和之上扶弾正少弼義勝手利河内守秀政其国源吾名其勝三万又余余繰り組後詰と称て上野国松枝乃城と夷掛る城を攻るなれども家幕下壮勇士大名寄騎の守内及彰記郎六人余繰りて横能欲者寄つ[illegible]

くつ[illegible]戦んと[illegible]て[illegible]小敵の大軍を恐[illegible]ん敵て討[illegible]る兵士[illegible]く固く城と守[illegible]防ぎ[illegible]義勝年[illegible]

[illegible]の分ちなく彰[illegible]攻[illegible]が大[illegible]

くと[illegible]れば城と開き降参[illegible]小国勝陣と申して人質と[illegible]

[illegible]に松山乃城[illegible]

八幡寺
乃藤次
源氏
源氏

佐竹義宣は雄勝郡横手城を守らせ、丹波守金子紀伊守山田伊勢守
等に人々山城を守らせ、家臣藤田内蔵丞を遣わし、城中
に籠城を候て陣人を加へ、
進む義論の城、脇橋の城、この城の城神宿の城とも悪く降参
の陣人二万余人を引き、小田原へ参陣、
ぐるされ、家臣藤田内蔵丞、軍忠と賞賜、
殺して御本陣退く、秀吉公近辺ひて、
一功なるよりて、
城及び何度とも、一城の城に屠腹、
威の法、城内に出と堂々と、
ひつじさる後の城、
軍民一人も生残まじと、
居さる者、人数の城、
其身小田原へ籠城、
一騎よ二の丸を固めさせ、
上杉勢の城と接戦、
藤田内蔵丞、
出羽仕置の命を受て、
ど数々多勢、
城兵の中の切腹、
者数を知れず、
城、喰さ呼で、
余、

城中に籠城、
陸奥守の恩を活もらの義、今大数

山中山城守
書を成田下総守
へ送る図

東[illegible]先討死の妻をもり汝が遁れんとそふ者れ[illegible]次分ヲ[illegible]

必し我は眼をとくはるふまじ此時は殿軍皆先を争て口惜きすとて郡ゝ[illegible]

今城陥りしを此討死の時なりとていさぞ遁れ去まじき[illegible]討

死としたるを覚えて[illegible]しかれば中山将監太きに怒びきしが三[illegible]

と[illegible]に援るべし得物を[illegible]旗本に藤勝多家が軍兵一揆のごとく

群て中乃丸を攻入らんとしれ中山将監散て躍まれりけ並べてす[illegible]

炮を[illegible]らふく打放せば理勝の寄手二[illegible]く討刎さし

ひるみて後をさりたる所で本丸乃まね横地監物と云[illegible]この鉄ヲ

震ひ怒り一度もせぐ城を棄く落来てり中山将監今れ先立之と

三百余人の[illegible]兵の[illegible]後を備へむとり雲のよそんせの中へ押つて嗔

怒を[illegible]横に薙ぎ[illegible]人叉字れ切巡て勇を振ふ[illegible]鉄[illegible]来て

の[illegible]士悉く討死し[illegible]纔に十余人城中へ引入ぐ自害して死す

今[illegible]藤勝多家乃両ね城中に入く御従し[illegible]山将監遊佐等が首を

本陣へ持せ来し軍乃次第を詳に言上しければ秀吉公大に感じ

給ひ郡軍忠を抽じとて感状馬太刀を両ねよ下し賜へり

[illegible]中山城守書遣韮田下総守[illegible]

秀吉公小田原の陣に在三月よりこれを[illegible]れども城内堅固

て落城の気を[illegible]しきとて秀吉公本丸城中へ[illegible]

城を韮田下総守今小田原乃城中に籠もり汝月来相観しきに

きたり誡の書を綴く我ニ降参の進めよと給へれば[illegible]

我陣へ降り書牒を差して韮田に送る其文に曰

[illegible]討伸す志は僕多く温岡に郭りける甚れ恐[illegible]

[illegible]甚深に能中国八州氏政家人[illegible]城[illegible]七八ヶ所[illegible]
[illegible]城に及び或い降人に[illegible]早船が去不[illegible]地悪の城[illegible]
[illegible]今大軍を[illegible]攻脱[illegible]国[illegible]城[illegible]
家業経長経周[illegible]国い去[illegible]すま[illegible]秀吉御
若松者[illegible]城[illegible]家康[illegible]急く被[illegible]意
[illegible]

六月廿日　山中城守

城田下総守殿

かくのごとき[illegible]び後を[illegible]城田[illegible]城田忽降参の
志とけど[illegible]書を[illegible]中より[illegible]甚[illegible]
[illegible]

[illegible]

六月二十日　山中城守

城田下総守

山城[illegible]ぎけ[illegible]書と秀吉[illegible]
[illegible]雄を[illegible]城田[illegible]書[illegible]を氏政が方へ[illegible]
[illegible]関左[illegible]諸城[illegible]志と秀吉に通ぜ[illegible]小田原
[illegible]城[illegible]
[illegible]氏政[illegible]秀吉降参[illegible]
右の口上を[illegible]城田が書状と氏政に[illegible]城中[illegible]
[illegible]水の[illegible]涌き浸[illegible]雲のごと[illegible]記る[illegible]

小田原
乃
城兵
歎
強弓の
精力

政人を城田が陣へ遣し、降参とぶき軍のみぎり同年陣（春）ごと
三度たびよつゝども城田殿と聞じて来るゝ氏政醫師
ちゝ中を（つ）ゐい以下二心と懐くのよ密にはさう統ども其侍
をもつゝ切ゝ之を使を立て招きを実を乳人と頼をしども終に来
ざるい行のそゝと城田殿大軍とんて来が居城恐の城を
囲を落城既に見なつり城中乃妻子及び下乃士卒悲嘆
矢らんの石垣よりへいと中と城守の勢で奏の吉へ降と乞
うもしけれて中へ入るを乞のつ奏ゝ氏政ばゝ長き勢
山と郷右衛門を以て八幡余人乃軍兵（と）城田が陣と整固せ
しむ武州岩槻乃城い小笠十郎氏と屋城方（ら）降遣
兵衛尉をんてお丸を中山乃妹屋下総守行国源左衛門尉

諸乃丸を守衛せ、めを臭い小田原へ籠城せり出岩槻の城を
囲ゝさるまゝの大ゐい朝時彈正永昌本村常陸成合安行加賀宗
次各二万余騎悪を繰せば美ゝ（り）が守ゐ妹尾行国家出で挑
戦ひ小笠乃大勝とゝん〳〵ゝ家用き力戦をるとゝ〳〵ゝ多勝（を）歌
雖く両人ゝを詩配（す）本丸の大ゐ行達と伍ゝ勝力盛て降参（し）岩槻
城を落ゝ乃小田原の城中へ入る岩槻の踊り（を）ゆの士卒恐怖の
心るきゝ行ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ城ゝ悪ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ実勝を出ゝ
の〳〵ゝ中ゝ〳〵ゝ城ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ小田の五ゝ
強弓の精兵ゝ城兵を乞ゝ乃死傷ゝ乃甚多（し）実に佛ゝ
八郎為朝強弩字教練ゝ〳〵ゝ弓勝ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
其面を乃ゝ今一矢と乞乃（り）乃ゝ乃吉（ば）ゝ〳〵ゝ対ゝと

よせてかうらのぐんぜい
軍兵
ばかりそ
ばび戦ふ
図づ
真顕説話篇巻十二

て至武者と出さしらるふふらる紀岳のよしを聞き大乃大矢来り
たるを城中より呼の者ありて城の流眼より二ツ矢送し
後炮して誘らひをまし数たくも打数せり秀吉大に激怒給
ひ城中の奴原い軍の法を知らざる中と討書をなして責給へ
来て氏政いはのと云くもそれ後炮と敵ちる者とめて
此矢といはしめ首を切て秀吉乃陣へ送り来る

小田原城中之備の様子

去程に秀吉数月の対陣味方乃退屈乃色ありて諸
と集め其心を試んと軍とりて陣をぞきやく為ふ小より陣
を進ん出てやさしらるい今帥を以て為ふ御い氏政勝ひとりて再び
囲む附守原乃使を以て為ふ御い氏政勝ひとりて再び
使代せんと雖り共漢計をなて

攻落んと為ふ地と為ふ殿下元来其心ろ計義理ろ
ものしまと称じ為ひ枝諸軍を令て二十余万騎と三ツ宜ちち
ふなて城の射陣営ふつ様ふ〳〵の雑さ物騒く見る
びりせ軍徒厳ふ見と守ま
脱ぎ焼と拠として是腹せるもあり酒とのと小芋と焼ひ拾びうろ
是若うしうば城中大ふ奇ふ風思び雖くそ力へふろ計浦田宰
相秀家の攻ひ山岩撥の城を〳〵少象十郎氏房ガ指にうろふ
秀家城中へ矢留と為ひて使者を以て赤良酒三荷生鯛十尾を為
天下ふる美者久く籠城守備乃勤労恐へくれ今送る和
者を以て士卒乃労と慰ら為ひ為ん為を為ふ〳〵の之実に美者の字計
いか〳〵乃良ふ為ふ悦ぶ為ふ今日ふ好ふと通ぶるも明日攻撃

源田秀家
小条氏房ヲ
酒肴ト
送る図

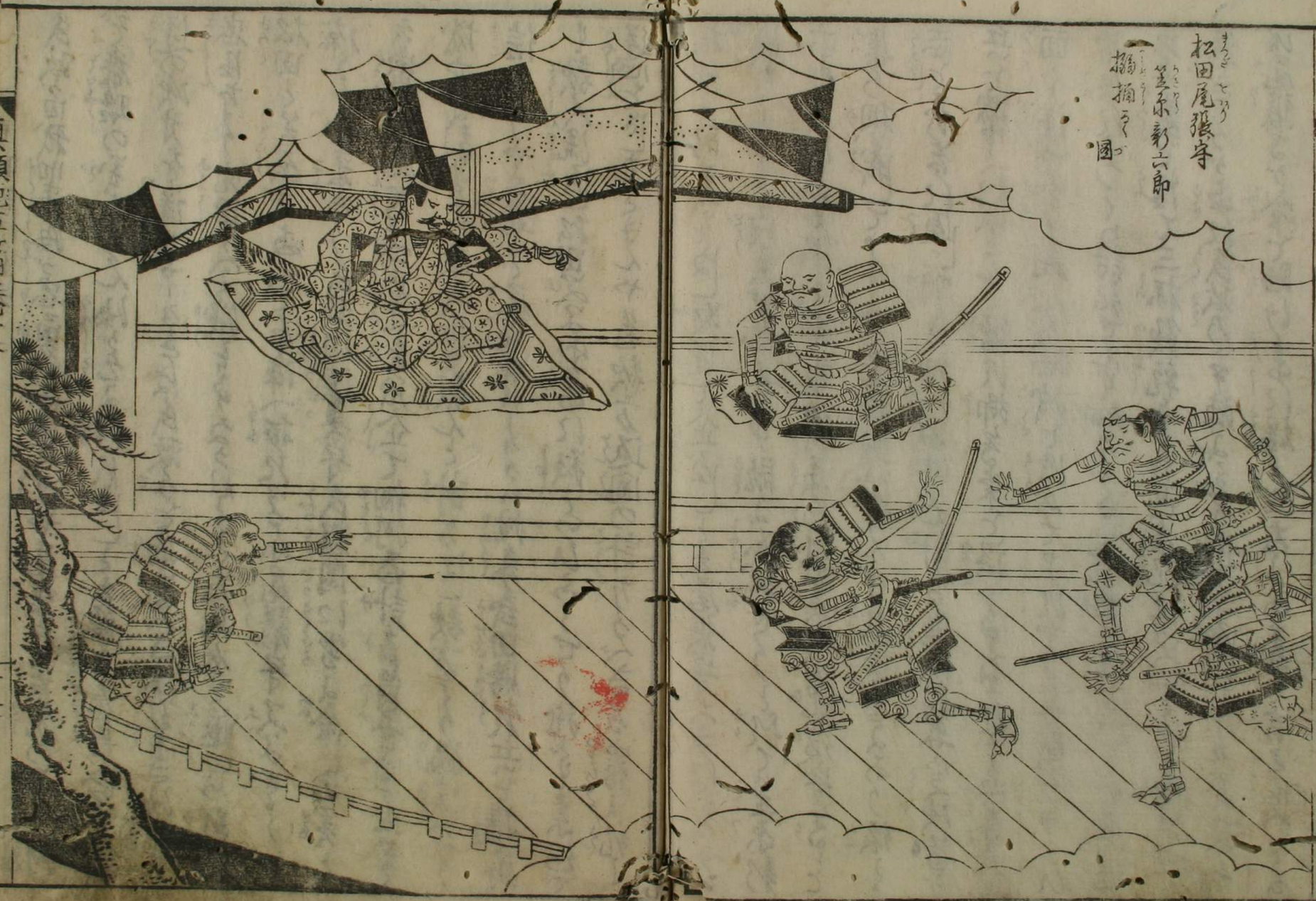
を更に対面せんと所望し若かりし頃若き者と数さん者い来なりしを
私乃憐うよりの儀名を立人のあふもとる所なりしを送りけ
れば氏房殆ど其志を感じ仕り酒を秀の家に送りて是
と対を後屢使を通じ秀の家氏房と面接せんと乞氏房も今
も心解く終に城を出て対面に対し秀の家やがて多い新しくは来者
よく計て和義を調合戦を止めて後京都にて来者を屋敷
に脱き無と解き肩衣着して奴僕となるは豈大の事にあらずや
と氏房もそれは心城に対して法くつの今は此
城の奴乞指と屈めて乞紹と結のもいうぞう歌乃大軍と退退る
対めんや如ぐ浮田秀の家に仍て此城を秀吉に附与し兵を
命を全くせんいふと云氏忠呂尼此地とて差ふる所かんじ奇
彼と弛て亟山乃城に籠うる小寄兵清宇氏紀之同大氏紀之
蜂門て回先皆秀吉が達に氏房と歌きるちう今和を乞て城と歌
に城をなどちくべ始より戦いて降参せんこて秀吉のなか
ちるに歌と引結籠城を高い此城を蔵乃地く為に
面くに甲斐なく摘ちぬり乃間き紀を為にるれとかく是
と制くれが暫く降参乃詳義も止て兵撃くと蓋る宴
に小田原乃城中に笠原新六郎亮致とつく若にり渠が実父い
小寄氏忠代の忠臣関八州乃軍民悉く敬陸ふ松田尾張る秀
亮と云勇武の士なり此新六郎い松田が長子にて剛勇無双乃
若者なれども酒色に溺し淫婦要をこのく放蕩不敬乃者なれば
氏政屢是といはしめを紀法に正るる小新六郎已が非とうこと

武功を傳へ知て氏政を眼に往時天正七年の春武田勝頼入内
通ひ甲州の軍勢と伊内に引入れんと氏政是を知りて大きに怒り
落と刎らるべきに為しと又松田尾張守穆敬き免許の義と
那ひ乃小流石河坂の老臣乃れば安やにも思雖て彩六郎が舅徳
と減ず外様の母うふく勧めさせる其節小笠原乃功臣是亦
系記法し娘ゆ居々れば氏政が命として是亦娘と妻合
を家に和続せ心有て是亦彩六郎と名乗る佐乃介の度の
一孔出来し小笠乃一族氏盛と降参の浮説蜜々と
乃ち遠山の守将小笠原清守氏規拒で是とちへうと攻る
ぐ〳〵城中乃形勢をひめ〳〵と外ゆ助の勢力
不陰勝れのべき拾戦よりひ〳〵是と氏政ゆ思もう
るれい実玄尾張守と勧め勧を城中へ引入れ秀の義人降参
やとろひ乃れ〳〵先は弱と考へ〳〵て考るの陣中行年定吹ぐる
下伝浦左内は色〳〵思めくて考へ考へ彼方へ考へ出て又尾張守ゆ陣
不して乃りかく〳〵と呼きゆ乃れば尾張守し光尤とやうろんと
乃武運中尽ろん運と是亦乃ち細〳〵と明
て是亦ろい己ゆ陣不して呼ゆ乃ろ法に〳〵松田尾張守二男左馬介
乃英と呼て中乃るい近身氏政氏忠又乃我と遇乃ふ甚以て跡
国方ゆ弱若居の礼と考乃吾是と街と〳〵ゆ〳〵いまゆ是と
是今運是乃企〳〵恐と報ん〳〵とゆいゆ〳〵左馬介涙と流
悲いろの〳〵ゆ志乃せ〳〵るや〳〵ゆ小笠原累代乃元老ゆ〳〵
恩沢を世乃ゆ家老と極め関左八州の士〳〵仰せ〳〵威勢乃

真田
赤馬介
又左衛門
國
真田記評論巻壹

強きの風を嘯く虎のごとく諸侯の背を傾きて敵と解んゆとぶむ
ゆるを今恩と忘れ義を失ひ逆臣高配」なつて天下乃人怖
ぢ」嗤ひきて誘ひ英人俗今世」の眼ばりとも義い泰山乃
ごとく一命い鴻毛乃軽」忠義の功を励ま」なつ人ぐ泉下に行の面
目なく忠臣」なり」朋輩乃対面」なつん輩つくい志と改め先祖乃
名誉清く」後へと流して誘ひ名れが流石の又堅乃通り憑
慢」て河内乃ゆ」が良みくゆ行い戦国乃汝乃及ぶ仮初乃
ごと不義の河乃ゆ如く後悔ぐきり」逆乃月殺せんゆい臣」として
腰刀と接拍切腹とんへ」と尤馬欲弱きて見と止め国恩を
ひそあてやるいと必ず安んじ給へ一旦誘ひ奉へ」せ」い義乃
命ゆ乃ゆ」と志と変め給ふとして何ぞ見と背くべ

相俗の計義を以て叛逆と企ぶ」と云尾張守大きによろこ
ぶ」ゆ」ぐ」ゆ言せ給ふいらの既ゆ勅せ」と仰て急京彩
い郎及び三男彈三郎ゆ尾内義尤近き大田肥後守等と
集ゆ相義」て」ゆるい此城の傾滅せんゆ甚近きゆあり依く
志と義ゆ古に」明義細河の忠沖面計多悪政月年実次等ゆ
兵いと城中へ引含んと欲に御名素と誘ゆるゆれと云一座乃
面ゆ潅で令義尤馬助と浮めてやに中うい合戦ゆ」ひ
勝負にゆ」くい討死せんゆ知りぐ」御面と給ひ」て尾張
守ゆ義と達て三杯飲乾さ」い甚ゆ配仕ゆ」く座」とて
退きゆ」ゆ亜に氏政乃本陣ゆ」ゆ近く座」てやゆ」ゆて
い尾張ゆ」命と助け奉に縁ゆ」べ一大ゆの義と言ゆ」べ


松田尾張守
笠原彩六郎
掘摘弓
國

氏政が自我剛来海が忠勇を感じ況や尾張守は古老の臣也何ぞ麁略の義をなさん海が言に任れ迄じと云終て左馬介へ又も致逆の次第を詳に申させば氏政手を拍て大きに驚き暫く言葉忠臣なり完勢人々に渡されるるはしく左馬介を退しめ軈て松田と笠原乃両人を本陣へ招きたる小尾張守又もさし招様子を出来せり氏政列座の真守氏規因に雪を命じて表く云密々に安海先の逆意企て細河が計る笛手箱が近いを城中の内に氏政氏直を殺んと計るはし欲方より顔ばの人々信なりや居やと尾張守申さるれ其手武田勝頼に近いと構る所も敵人流言し松田又小常に殺とらひらせり然とも素行で逆心とはしてきまんや先欲方返間の計なるべき言る害に乳り

兵人と云ふ氏規笑て走る者は欲方のことに何ぞ海が子左馬介既に之れを追進せり先又返向なりや松田又子先を逆て進と変じて云る也実に拍めて先力士に命じ又子を別て之れ方本丸の側に押込数百人の中兵士附て守らしめ城中弥申して平に心を会合て何とるく物騒なる始終漏人は兵さり之より此附寄手の陣中に太田三楽斎と云ふ者あり乗の吉云の御前に来り言上せるは城中松田尾張守は実心を蓋き味方に返忠をべき体に見へけるや松田が弑心は第手定次より密に乗の吉云へ申上するのにて寄手の陣中に知る者也し然るに三楽斎かく申上ぬるを乗の吉云膝を進め海進人に達するやと問ひければ三楽斎答て申せり素人の中にこれを聞て城中とよく何ぞに松田が勇猛の人乃然るべしと不可ならん此に教へ軍

後と正さんと諸臣とはしめんと渠四来臣ども若よりて公と味方を通ぜる友之乗吉云其者ども和睦感じ給ひ嗟嘆して正に摩耳多乗家と觀て宮てへい今実之三ツの不思議あり卿是と知りやと奉答へて其一ツハ三乗殺ぐ者智なりと甚余三ツハ解り難いとやとする乗吉云義ひ法ひて一ツハ我匹夫より起て天下のまつり不思議よりハ一ツハ今一ツハ三乗殺ぐ才智なりて一国ぐも有りを知ざ法義の不思議のうちハ一ツハ人間皆教育して曰く城内る命のごくあらと

小田原落城

天正十八年秋七月乗吉ふるふ小田原より城中を囲ひ法ふみ上下の兵士退屈労を苦しむなりさまるしが政治て是と屠城兵死亡ものく味方の士卒を撫ぐと思惟ひ法ひ羽柴下郷守勝雅を使者として城中へ入しめ氏政氏直を若てやもを四方ハ囲ひ城を開ひて陣系ハ侍を相接両国とをく外ものと和睦ひ合戦をかく衆ゑき軍民を敗しハんを法ゑきにハ氏政ハ若てやるハ吾民く関東七州と外せ一国の僅ゑ二国のまつんよりハ速く討死をべく敢て陣系乃気を内ハ城中さまぐの雑説繁り推系て歌方ハ返忠して今霜歌兵を引ハうゑ渠遅言をとしえさく城ゑ出ハ陣系せるなんどハ口に罵うく妻子兄弟のうちをこひ申しハ和睦いうぐんと心細く和多て今ハうぐしく法ぎ戦ハ気勝りるく只若んでハ人ハ氏

小柔武士
真家郷之芳
陣

出はらくし勅諚とゝ[illegible]城中めくけてらく乱れ[illegible]
勅の勢りなくくして上運命開きがし徐々軍民を敵さんとりい
戦先陣して士卒の命と助けだやと山と鄉右衛門[illegible]
馬より打落り城を出らく摩[illegible]
入らく年家祖ぬりは孫弥ゝく羽柴下総守勝雅とて殿下
へかくと云よ氏出羽勝雅と若い素秀吉に暮ちに陣素仕
るよい氏政殿下城中軍民乃命と助け給ふ方らが明日城と開ひて
お渡とし勝雅急き殿下の御前に出て氏政ロとやとる秀
吉云上陣素祖ぬと云殿ひ乃第ゝ悪く敵さんば氏政
大きに驚び城よりて城中の軍勢と敵ひ[illegible]ひくゝ落ゝし
秀吉云ゝて源城中勢を集[illegible]切市正見元両人城清五の者ゝ

[illegible]万猿舞ゝ乃ゝ紛ゝ[illegible]ゝ城中上下乃
男女共ゝ[illegible]ゝ已ぬ[illegible]ゝ出ゝ多ゝ実に[illegible]義乃理りて
は[illegible]き武中宗左宗左補氏政きの[illegible]国左八州乃大守とゝ威を
薩国ゝ震ゝ[illegible]人のゝ[illegible]乃七月八日[illegible]安堵ゝ[illegible]
源世の日敬迎ゝ来ゝ記と記ゝ[illegible]
附ゝ殿下伯出ゝ[illegible]ゝ吾自ら出国ゝ出馬ゝ[illegible]中宗一家の[illegible]義と正
[illegible]ゝ氏政ゝ悪ゝ助けゝ戦令天下に知られ氏
政氏[illegible]ゝ切腹ゝ氏出兄弟を[illegible]ゝ石川[illegible]
ゝ中村武部左を[illegible]ゝ安堵ゝ[illegible]ゝ氏政氏[illegible]
ゝくゝして出ゝ[illegible]ゝ命と結三[illegible]ゝ右命乃[illegible]ゝ
且ゝ其[illegible]ゝ[illegible]ゝ氏政氏[illegible]

民政武者
自害の図

気を悟り流浪のつゝ後を乞両人辞世の詠を流し心しんく
自害したるぞ哀なりけり

辞世

雨雲の晴るゝ月も胸の雲はらひ晴れぬ秋の月

陸奥守氏盛

天地の清き中より生れきて四の海に入るぞうれしき

氏政又十三歳氏盛又十一歳之三位殿と称して奉の者云々

云御頃じ元王命を陸いぎる者るれば其衆を礼と石田
治部少輔三成を以て奉に送りて獄門に梟らと
うり家と堅山と等し小奉行流る氏級に先よまるを大軍を
て云聞く外郎一を探破らるる氏級誘勇と奮い怒を

云々厳く方ぎ戦は今も牧望固を籠城しうりそれと小田原の
城落て氏正氏盛自殺のはしまへ々れば今い籠城し陸奥とて城を
開いく出らるを乗の者云氏級る武勇を感じ七を石と酒菜の料
くく煽りる枝松田左馬介乗の者云の御悪を乗り
捕つれく陣中を居しうしぐ思多勢兵衛と云を二の丸松田が首と
刎よと伯々る勢兵衛長り国語うくる体よりて白又の尾張守
と兄彦三郎両人る首と刎左馬介を助け小りり後るけりとと
る者ひうて乗者云の御味うと乗るもうぐも浪うくる中しく
別のを細をうりる左馬介を摩恵多家て仕へて羅又を石と楊
うり枝小奉の一族氏正氏房と結らと妻を後妻三十余人善
代の后下又十余人絶る世ら人登くせ玉人登るを結そしらを

禄を賜りけんぞろに労り給ひぬされば国[illegible]悉く静謐に大
軍を引て奥州に到り給へば伊達政宗那須[illegible]出て迎へ奉り
仙台へ供奉し参らせ種々饗応をなし奉る南部津軽松前等
羽秋田乃大名小名悉く参上し謹で幕下に属し奉る故に功ある
賞し罪ある伐し国をわかて諸侯に賜ひ同年八月会津を立せ給
ひ道の程所々の故跡風景を御覧ぜられ漸ふして駿河の国清見
寺に着せ給ひ清見寺の大輝長老へ御詠歌を下し賜ふ
東夷征伐の為天正十八年三月の初つかた都を立給ひ駿河国
清見寺に立寄給ふ彼地の風景言語に絶三保の松田子の浦
乃月富士の根の雪眼前の眺望誠に浅からぬを公乃紅
葉ぐさの花の色も殊かうに[illegible]もかきもむこと

又六月まより東乃夷を平け陸奥を巡り心乃ごとく国民
を従へ治めたまふありて八月廿日余り又彼寺に立寄り給へば
当寺乃大輝長老禅刹乃正宗を嗣れ俗縁遁れし御志を
感じて書院の前に石加へて詠らんとせ給ふ弥生の頃花の構る
ど漸く紅葉して彼能因が霞と共に出しけることの古るさとを
おほせ一首を残し給ふ

清見寺紅葉に見る花の色乃幾度もうく紅葉しにけり

又彼浦乃眺望

名にしおふ田子の浦波立ちかへり又も来てみん富士の高嶺の雪

かくて其所を立せ給ひ九月の初め都に凱陣ましまして
丁亥の年よりして百二十有余年天下悉く[illegible]戦国の世と乱れしを

秀吉公
御凱陣
の圖

豊臣乃威風海内乃ふれ家乃ふ[illegible]
拾ひ[illegible]
かぎりなうう

繪本古今記五篇巻之十二終